

昔むかし、あるところに、貧乏な男がいました。男はしょっちゅう、

「あーあ。おれの福の神ったら、いっこうにおれのために働いてくれない」と、仲間たちにはやいていました。

ある晩、男の夢に、福の神があらわれました。

「おい、ろくでなし。どうしておまえは、世間の人たちの前で、わしのことをぼろくそにいうのだ。わしがおまえのために働かないだと？ よく知りもしないくせに、そんなことをいうもんじゃない。さあ、となりの町に行ってわしを見つけるのだ。わしは、くさったさくらんぼの中で、おまえのために働いているのだ。わしを見つけたら、おまえはたちまち金持ちになるだろう。多少もうける気があるなら、おまえだって少しは働いてくれなくちゃな」

男は目を覚ますと、くさったさくらんぼの中の福の神を探しに行ったものかどうか、思案しました。それから、

「よし。正夢かどうか、調べに行くとするか」といいました。

朝早く、男はとなり町へ出かけて行きました。町に着くと、さっそく大通りを歩いて福の神を探しました。それから、町の小さな通りをくまなく歩いて探しました。けれども、福の神はどこにも見つかりませんでした。

もう暗くなってきたので、宿屋に向かいました。とちゅうで、食べ物屋の前を通ったとき、店の前にさくらんぼが落ちていたのを見つけました。男は腰をかがめてさくらんぼを拾いました。すると、店の主人が飛び出して来て、

「おい、待て。何を見つけたんだ。見せろ」とさげびました。男は、

「何でもないよ。捨ててあったさくらんぼだよ。まさか金貨でも見つけたと思ったのかい」といつて、てのひらを広げてさくらんぼを見せました。

主人は、男がくさったさくらんぼを拾うほど貧しいと知って、店の中によび入れました。そして、

「おまえさん、どこから来たんだ。何しにこの町に来たんだ」とききました。男は、となり町からやって来たこと、夢で、福の神が、くさったさくらんぼの中で働いてくれているといったことを話しました。すると、主人は笑っていました。

「おまえさんも大ばかだね。いったいどうして夢なんか信じるんだい。おれも、ちよくちよく夢を見るがね。それは、おまえさんの町に、水の管が三本ある泉があつて、その泉の前の家のかまどの中に宝物があるっていう夢だ。でもね、おれは夢なんか信じやしないよ。福の神は、くさったさくらんぼの中になんか、いやしない。福の神は、仕事の中にいるんだよ。おれたちや、一日働いて、その日食っていけるだけをかせぐ、それ以上、要りやしない。いいかね、これが福の神ってもんだ」

男は、とっても恥ずかしくなつて、逃げるように店を出ました。

「おれの頭はどうかしてたな。あんなひどい夢にだまされて、笑い者になつちまつた。

みんなにからかわれないうちに、さっさと家に帰ろう」

男は一目散に走って、その夜のうちに家に帰り着きました。

男は、それから、人に会うごとに、

「あーあ。おれの福の神ったら、いつこうにおれのために働いてくれない」とぼやきました。

福の神は、せっかく教えてやったのに、男が自分を見つけないので、かんかん腹を立てました。そこで、ある晩、福の神は男の夢にあらわれて、

「くさったさくらんぼの中を探すんだ」とどなりました。

男は目を覚まして、

「ちくしょう。福の神が夢に二度もあらわれるつてのは、いったいどういうことなんだ」とさげました。

「さくらんぼなんて、あの晩捨てちゃったし。今さら、あのさくらんぼをどこで手に入れたらいいんだ。ええい、ちくしょう。それとも、あの店のおやじが夢で見たつていつたことがほんとなのか？ 水の管が三本ある泉の前の家って、どう考えてもおれの家だよな。待てよ。やっぱりちよつとかまどの所を掘ってみようか」

男は考えた末、すきを取って、かまどの所を掘り起こしてみました。すると、まあ、金貨がいっぱい入ったつぼが出て来たのです。

「へえ！ おれの福の神は、ほんとうにくさったさくらんぼの中にいたんだ」

男は大金持ちになったということです。

おしまい

原話：『世界の民話4 東欧』飯豊道男訳／ぎょうせい

再話：村上郁